

## 町名と祭礼の変遷雑考・抄

—東京のまちと暮らしの歴史を考える—（連載番外）

早稲田大学教育・総合学術研究院（講師）

日本大学経済学部兼任講師

川西 崇行（市街地・寺院研究会）

### 0 緒論

#### 0-1 コミュニティのフレームとしての町名と祭礼

まちへの愛着・定着、コミュニティ形成のフレームとして、筆者は予てより、歴史的建造物・景観のほか、都心の社寺・祭礼・旧町名（昭和39年の住居表示法以前、ないし震災復興期になされた町名町境整理）といったものに強い関心があり、一部から「逆コース」「非能率」と言われようとも、都市の歴史的建造物の保存・修復・活用・景観形成といった領域に腐心してきた。

旧町名の復活などでは、先例として金沢市などですで行われ、まちづくりの有力な資源となっている。東京都台東区においても、1990年代初頭に復活の機運、また現在においても「旧町名の利活用」として（やや矮小化されてはいるが）取り組みが続けられている。また、こうした祭礼では、渡御される町内神輿（あるいは曳かれる山車）に、住居表示以前の町名（あるいはもっと古い呼称）が町内会・町会の単位毎、「駒札」という形で神輿の頂部に掲げられ、あるいは山車の銘に記されており、筆者なども幼年の折、「象三」「馬一」などの神輿駒札を見て怪訝に思った記憶があり、斯かる方向性への興味を持つにいたったのである。（上記は「浅草象潟三丁目」「浅草馬道一丁目」の意味。）

#### 0-2 東京市街地における旧町名の状況

この昭和39（1964）年から以降数年・十数年間の「町名変更」の嵐の傷跡は深く、台東区内だけでも、耳に慣れ親しんだ、例えば「（南・北）稲荷町」「御徒町」「仲御徒町」「竹町」「西町」「（東・西・元）黒門町」「金杉」「坂本」（以上、下谷区側）「田原町」「象潟」「猿若町」「聖天町」「聖天横町」「田町」などに加え、江戸期以前からの由緒がありながら、震災の折に整理された小規模な地名：例えば材木町・並木町・金龍山下瓦町・黒船町・・・以上、浅草区側）などを考えると、非常に有効なまちづくりの資源を滅失したことに、今更のように気づくのである（注1）。

これを東京の旧市街地一般にまで目を広げれば、神田の旧町名（旅籠町・末広町・同朋町・台所町など）、赤坂の旧町名（表町・伝馬町・田町・一ツ木町など）、芝の旧町名（芝口、神明町・神谷町・巴町など）、麻布の旧町名（飯倉・飯倉片町・霞町・筈町など）本郷の町名（東片町・肴町・窪町・駕籠町など）など枚挙にいとまがない。

連載では、主に帝都復興・震災復興期の建築・集合住宅と街の佇まいという趣旨で原稿を記してきたが、今回は、来る三月十八日の浅草寺本尊示現、来年の「船渡御」祭礼（詳細は後述）を前にして、後章では祭礼の変遷を例としてこうした事項について考えてみたい。

### 1 （具体例としての）三社祭の概要—今日における祭礼の概要

三社祭は、今日でも大変な盛儀であり、東京の初夏の風物詩ともいえる大祭である。巷間、浅草寺（浅草観音）のお祭りとして認知されている節もなきしにしもあらずだが、

正しくは、浅草神社（それ以前は「三社権現」、明治の神仏分離後、一時「三社明神」を名乗ったのち、同6年から現名称）の例大祭のことを、地元は特に旧名称に親しみをもって「三社祭」呼んでいるのである。かつては隔年で大祭・小祭としていたが、現在ではその別は見出し難い。

## 2 三社祭礼の形式の変遷と三社権現の由緒

上に「観音様のお祭りとして誤認されている節も」という旨を書いたが、明治の神仏分離以前の、あるいは浅草寺縁起・由緒に照らすならば、浅草寺と三社権現は切っても切れない関係にあって、祭礼も、旧暦3月18日の観音示現（浅草の観音様が隅田川から出現した）の日に行われていた「舟祭」（船渡御）がその原形とされている。

話がやや後先になったが、三社権現（浅草神社）の主祭神は、檜前浜成・竹成（ひのくまのはまなり・たけなり）という漁師の兄弟と、郷土（郷司）の土師中知（はじのなかと）の三柱で、社紋の「三ツ網」もこの三柱を象徴したものである。

### 2-1 三社権現の由緒と性格

浅草寺の縁起によれば、浅草寺の御本尊である観音像は、628年（推古天皇36年）3月18日の朝、檜前浜成・竹成兄弟が隅田川で漁をしている折、網の中に金色の仏像を得、土地の有力者・土師中知が聖観音像であることを見極め日夜礼拝し、自邸地を奉献して観音堂を構え、私度僧となって供養に一生を捧げた。また檜前兄弟も同様に観音様を敬い、この三人の子孫には浅草寺・三社権現の祭祀について半僧半俗の、一種の社僧として特別の地位を与えられた（専堂坊、齊頭坊、常音坊。三譜代と総称した）。

つまり、浅草寺の開基、浅草の観音様の出現に功績のあった地元の人々が、浅草寺と深い由緒のある神（権現）として祀られたのが、三社権現（現称は上述のとおり、浅草神社）である（注2）。

### 2-2 祭礼の原初的形態（明治以前）

祭礼の起こりは1312年（正和元年）に神告によって、浅草観音・三社権現の由緒事に従って隅田川（浅草川）に神輿を舟で渡し、祭礼を執り行ったものである。そのアウトラインは先に示したとおりであるが、ここでは少し詳細な解説を加えたい。但し、山車や御練に類する祭事は煩を嫌って本稿では除いた（注5）。既述の浅草観音本尊出現の奇跡を「示現」（じげん）と称し、浅草寺においては「示現会」という大法要を連綿と毎年執行している。三社権現社におけるかつての祭礼、すなわち「舟祭」（船渡御）は、その示現のエピソードを再現したものであったといえる。その概要は、観音堂に上げられ、即ち、三社権現宮神輿が観音堂に堂籠りし、浅草寺一山僧侶の読経供養・三社権現社の神職から供餞祝詞あって、その後観音堂を出、宮神輿三基に山車などを連ねて、浅草寺から浅草御門（浅草橋あたり）まで渡御し浅草橋付近の御旅所に安置、そこから隅田川の水面の舟一艘について宮神輿一基つづ下ろし、浅草寺一山の僧侶や三社権現の神職らが供奉舟に分乗、びんざらの神事、神楽の太夫衆も別の供奉舟に分乗し神事・祝詞などがなされた。

さらに漁労集落として栄えた浅草の地から移転・分村した佃・大森辺り漁師らも渡御用の浄船の用意等出仕して、一同で隅田川を遡り、駒形（現在の駒形堂）から花川戸あたりで上陸、三社権現の御社に還御、というかたちであった。（注6）

ここで垣間見られることは、古式の祭礼の次第のみならず、古い浅草の範囲の認識へのヒントや、古にこの付近の江戸浦（宮戸川＝隅田川下流）にあった漁師が、江戸湊に広範に拡散した後も、地縁を絶たず、都市内の街毎のゆるやかな連関を保っていたこと一根本に、旧居住地・新居住地の構成や、旧集落人（特に、浅草というユニークな土地とのゆかり）としての地域の Identity のようなものが垣間見られるように思われるのである。

### 2-3 祭礼の変化・氏子町域の拡大（明治以降）

さらに、明治の神仏分離によって、浅草寺との縁が濃厚に見て取れる船渡御及び宮神輿の観音堂御籠、浅草寺寺僧による供養などが一切廃され、幕末当時、材木町・花川戸・聖天町の宮元三ヶ町はじめ浅草寺に極めて近傍の十八ヶ町であった氏子町域（注3及び注4）への神輿の渡御（庭渡御の拡張）という形式に転じた。

かつて氏子町域は基本的に既述の十八ヶ町の範囲であったが（注3及び注4）、（1）明治初年、浅草寺北方の浅草寺領千束田圃のなかに起立した新たな町を加え、（2）関東大震災による区画整理による町名整理・町域の変化、（3）戦中の強制疎開帯・移転と空襲焼失地—その復興などのプロセスを経て、氏子町域が著しく拡大した。特に、西に境を接する小野照崎神社のそれと完全に接するに至り、明治以前はバッファとなっていた領域の市街地化の進展によって、かなりの面積・町域が新たに浅草神社（三社権現）の氏子町となるに至った。上述（3）の戦後復興による強制疎開帯の復興・氏子町編入、浅草北部の編入などを以て、最終的に四十四ヶ町（これは住居表示による町丁目ではなく、旧町名・町域を多く引き継いだ町会・町内会等の数による）の範囲に拡張された。これによって、旧浅草区の過半に及ぶ、現在の広義の「浅草」の範囲内が、概ねかたちを見せたと言って差し支えない。そして、その広い氏子各町内を宮神輿三基が、三方位に分かれて渡御されるかたちが明治以来、拡大しながら定着していき、さらに祭礼の日程も明治の改暦の関係もあって現在の五月祭礼が定着している。また当初は五月であっても、旧三月の祭礼同様に観音縁日の十八日・十九日に行われていたが、高度成長期の交通事情や担ぎ手の工面などの諸事情により、戦後（昭和38（1963）年）、五月十八日・十九日に最も近い土日を神輿渡御の日に充てて日程を組むこととなったものである。

### 2-4 近年の変化

以上に記したように、現在の五月の三社祭礼は神仏分離以前の船渡御等を全く陸上の各町神輿巡幸に置き換え、浅草寺との合同の供養という仏教色のある古式をカットアウトしたものであったが、浅草寺御本尊示現千三百年記念の1961（昭和36）年を近年の先例として、2003年（平成15年）から、示現会に近い日を選んで宮神輿の観音堂堂上げ・堂下げの儀式が復活され、神仏分離以前の祭礼の様子を偲ばせる厳かな儀式となっている（注7）。

船渡御は、戦後になって何か地域にとって記念すべき年度—例えば、1958（昭和33）年の観音堂復興記念などで試みられているが、来年、2012年（平成24年）には三社祭齋行七百年の記念として、三月の舟祭礼・船渡御を再現する由を仄聞している。

もし江戸の盛儀を古式ゆかしく、まさしく『東都歳事記』の挿図のとおり、神輿の四周には四神剣（東西南北の守護を象ったもの）や幡、供奉舟には威儀を正した神職・僧侶が並び、地上には町中を供奉の山車など・・・と絵巻物のようなシーンを想起する。

### 3 まとめにかえて

巷間で「江戸三大祭」を神田明神・山王権現（日枝神社）の両天下祭（江戸の鎮守として江戸城内での山車、神輿の御披露目が許された）のほか、残りの枠は深川八幡か三社権現かとよく競われ、江戸後期の狂歌では「神輿深川、山車神田、だだっぴろいは山王様」というものが残っていたりもするが、祭礼の歴史の古さ、親しまれ方では三社祭のほうが少なくとも江戸期初期、江戸の庶民の間においては優位であり、江戸図屏風（寛永年間初期「江戸名所図屏風」（出光美術館蔵））の中に祭礼が大きく描かれているのは神田祭でも山王祭でもなく、三社祭である（注8）。また「神田祭」などの歌舞伎舞踊であるが、「三社祭」と称された天保年間作の清元からくる歌舞伎舞踊があることも付記しておきたい（注9）。

しかしながら、この庶民に親しまれた有名な祭事にも、神仏分離といったときの政治や商業化の波で、世間に名高い三社祭もさまざまな変容を余儀なくされ、規模が大きくなる一方で、古式の厳かさを少しずつ損なってきた経緯が本稿によってある程度推察されることであろうと思う。例えば、氏子各町（旧町域≒町会）の持っていた小集団の濃厚な祭礼コミュニティが、いわゆる神輿担ぎを趣味とする人の大量入込によって変質する、といったような事態もそのひとつである。また導入章で述べた町名の問題とコミュニティの Identity との相関も然りである。

頭記したが、祭礼や民俗伝統の継承のありようと同様に、市街地建築の形成・景観の整備に当たって、その場に対して相応しい、拠るべき意匠、然るべき材の選択、然るべき建築規模の選択によって、皮相的な「いかもの」ではない—authenticity の踏まえられたまちづくり・景観、社会的な「ストック」としての永続性と品質、観光者への敬意、先人・歴史への畏敬、そうしたものを兼備したものでなければならないと、旧町名に端を発し、祭礼の変遷・変形、さらにまちづくりに思考を発展して、強く思う次第である（注9）。

#### （注1）

この旧町名の保全に関する東京都心各区の取り組みであるが、（1）文京区の「掲示板」「住居表示付近に緑色の小金属板による表示」が最も詳細であり、諸区が「掲示板のみ」でそれに次ぐ。千代田区では城郭に擬せられた装飾掲示板で旧町名を表示している。なお現在これらについてはとりまとめ中であり、別稿で披瀝できればと考えている。

#### （注2）

土師中知没後、中知の子が観音菩薩の夢告を受け、三人を権現として祀った社と伝承されるが、権現号の通用は概ね鎌倉期以降であり、神社の由緒と矛盾がある。なお、権現号の考察と神社の開基年代に関しては、網野宥俊（1962）『浅草寺史談抄』浅草寺 pp.684-687 に詳しい。さらに、現在においては浅草神社が公式見解として（HP 上などで）網野の言説を認める形となっている。

（浅草神社 HP・<http://www.asakusajinja.jp/asakusajinja/yuisyo.html> など）

#### （注3）

十八ヶ町（観音縁日に因むとの俗説があるがはっきりしない）で諏訪町、駒形町、三間町、西仲町、田原町、東仲町、並木町、茶屋町、材木町、花川戸町、山之宿町、聖天町、浅草町、聖天横町、金亀山下瓦町、南馬道町、新町、北馬道町、田町を指す。それぞれ、雷門前から駒形、田原町、川沿いに北上して花川戸、馬道沿いに馬道、田町など現在の氏子範囲よりかなり狭い。うち材木町、花川戸町、聖天町を宮元三ヶ町と呼び、祭礼において特別な地位を占めた。

#### （注4）

十八ヶ町に加え、船渡御の折の南行きの道中にあたる御蔵前片町・茅町（現在の蔵前南部）・天王町（現在の浅草橋北）・

黒船町・三好町（現在の駒形南方）なども山車などを以て祭礼に参加していた形跡がある。網野（1962）p.725 及び注5を参照。

（注5）

注4の補足。山車による祭礼当日の行列について。早朝、山車を中心とする行列が浅草見附門外に集合し、御蔵前→諏訪町→並木町・・・と順に北上し、表参道から浅草寺境内に入り、観音堂前（神輿は堂に上がったまま）に参詣、堂前で芸を演じ、隨身門（現在の二天門）を出て各町に戻った。この行列の境内退出後、観音堂から神輿が下ろされ、船渡御への動作に移行した。

（注6）

斎藤月岑編（1838）『東都歳事記』の当該箇所：三月十七日・十八日の項目に三社祭の記述がある。ここには「世俗誤りて観音祭という（後略）」という記述も散見され興味深い。また同じく斎藤月岑編（1836）『江戸名所図会』における三社祭の記述も参照されたい。

（注7）

なお古式の祭礼については網野（1962）pp.701-741 に詳しい。

（注8）

浅草寺日並記研究会編（2004）『大江戸を歩く』東京美術 pp.175-177

（注9）

東武電鉄・不動産は廃線・東武浅草ビルディング（松屋百貨店）の改築方針を転換し、現状のサイディングをはがし耐震工事を行った上、創建当時の意匠に復する旨を2012年3月発表した。これにより、近隣の神谷パー（1911年）、地下鉄旧一番出口（1926年）、吾妻橋（1934年）など帝都復興期の趣を活かした吾妻橋西詰交差点の再整備が可能となる。しかしながら上記に直接関係して、惜しむらくは過年の地下鉄ビルディングの解体（保存の提起・記録調査すらなされなかった）、浅草寺惣門である雷門前の区立施設改築問題があり、また浅草寺近隣では隣接の「六区地区地区計画」中、五重塔西側隣接にあたる街区の建築高さの問題（同計画中、私企業所有の2街区のみ「五重塔と同じ高さ＝約53m」とし、他街区は36/31mで制限）などがある。